

⑤ ウの検討例

意思の
表明

小学校の特別支援学級在籍の児童が交流学級でみんなと一緒に
ドッジボールをしたいと希望している。

背景
実態把握

Aさんの場合

(小2：知的障がい特別支援学級在籍)
・体力面では問題がないものの、ルールの理解が難しく時間がかかる。

Bさんの場合

(小2：自閉症・情緒障がい特別支援学級在籍)
・ルールの理解はできているが、状況判断力が弱かったり、負けると泣き叫んで粗暴になったりする。

Cさんの場合

(小2：病弱・身体虚弱特別支援学級在籍)
・心臓病により運動制限がある。簡単な体操はできるが、走る、跳ぶなどの激しい運動はできない。

学校の
基礎的
環境整備

- ・自閉症・情緒障がい特別支援学級の担任が、特別支援教育コーディネーターを担当している。基（2）
- ・必要な児童に個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成している。基（3）
- ・学校の備品として、AEDがある。基（5）
- ・特別支援学級に1台タブレット端末がある。基（5）
- ・特別支援教育支援員がいる。基（6）
- ・特別支援学級がある。基（7）

検討
決定
提供

メンバー 本人・保護者・特別支援学級担任・交流学級担任・特別支援教育支援員で相談・協議

メンバー 本人・保護者・特別支援学級担任・交流学級担任・特別支援教育支援員で相談・協議

メンバー 本人・保護者・特別支援学級担任・交流学級担任・養護教諭・特別支援教育支援員で相談・協議

合理的配慮の内容

- ・ルールを事前に個別で学習できるようにする。①-1-1
- ・本人への言葉の掛け方等について、交流学級の児童へ理解啓発を図る。②-2
- ・ルールを図式化したものをホワイトボードに掲示したり、審判係が笛や旗で明確に指示を伝えたりする。①-2-1
- ・コートラインが視覚的に分かるように、コートの四隅や中央線の端にカラーコーンを置く。①-1-1
- ・行動の手本となる児童と同じチームにする。①-2-3

合理的配慮の内容

- ・ゲーム中のマナーや負けた時の言動について事前に学習・確認しておく。①-1-1
- ・本人への言葉の掛け方等について、交流学級の児童へ理解啓発を図る。②-2
- ・教員間で共通理解を図って暴言などへ一貫した対応を行う。②-2
- ・クールダウンの場所を確保し、特別支援教育支援員が付き添う。③-2
- ・客観的な振り返りができるよう、タブレット端末で録画しておく。①-2-1

合理的配慮の内容

- ・本人への配慮や体調の変化等緊急時の対応が必要な際の連絡・支援体制について、カードに記載し携帯しておく。また、教職員だけでなく交流学級の児童への理解啓発も行う。②-2
- ・本人の体力を考慮して1ゲームの時間を決めたり、交代制にしたりして、休憩時間をとる。①-1-2
- ・椅子に座って投げたり、防御板を使ったりできるポジションを設けるなど、本人も活躍できるルールを交流学級の児童と一緒に考える。①-1-2、②-2

みんなと一緒に楽しくドッジボールができたよ！

評価
見直し

- ・事前のルール確認や友達の言葉掛けで、ボールを投げたり、当てられたら外に出たりしてドッジボールができた。
- ・ルールが分かってきたので、チームを変え、いろいろな友達と一緒に活動するようにする。

- ・負けて悔しい時にどのようにするとよいか分かり、自らクールダウンの場へ行くようになった。本人と相談しながらクールダウンの場をドッジボールの場に少しずつ近付け、落ち着いたら次の試合に参加しやすいようにする。

- ・どのチームにも椅子に座って投げるなどのポジションを設けたことで、みんなでドッジボールゲームを楽しむことができた。
- ・今後も、緊急時対応やカードの記載事項などについて、確認・情報共有を行う。